

International Center Newsletter

6月号

Vol. 78

Profile

☆ スサンナ ☆

短期留学生。
フィンランド出身。
日本語学習歴1.5年。
現在、Horse Riding
に夢中の21才。



キタミ ウィ キョウルマンキッ

チョンシルハットン イルボン ヨンスー

キタミの 겨울을 만끽 —충실했던 일본연수

北見の冬を十分満喫 —充実した日本研修

「北見工業大学での研修を終えて」

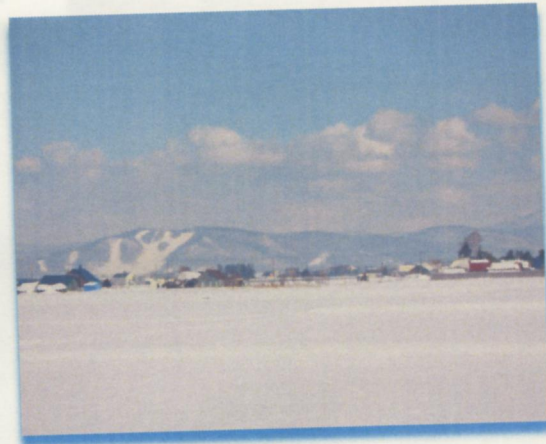
ハン ヨンロク

日本交流体験は私にとって初めてパスポートを作って国外に出た初海外旅行であり、初めて外国人の友達と出会う機会でもあった。もちろん、私にとってすべてのものが新しく、珍しかった。

私だけの考えか分からないが、日本といえば東京を思い浮かべるが、北海道はまた別の経験を与えてくれた。飛行機の窓から眺めた北海道の姿は、まるで白い図画用紙のような感じだった。雪が 1m 以上も積もっている姿は驚くべきものだった。また、壁のように積もった雪は純白のきれいなイメージを与えてくれるようで、本当に素晴らしかった。

今回の交流を通して、私たちは多くのことを見て学ぶことができた。まず、日本の文化を直接体験することができ、体験を通じて韓国とは異なる市民意識に驚いたと同時に、環境に対しても色々驚かされた。また、街の通りにはごみ箱がほとんど見受けられず、これもまた驚いた。このことは、初めは変に思っていたが、少し時間が経ってみると分かるようになってきた。つまり、人々は自らごみを出さないという意識が強いのである。韓国もきれいだと思っていたが、こんな小さなことまで気を使う日本の市民意識は、本当に学ぶ点が多いと思った。

私たちが今回一番関心を持ったのは、やはり北見工業大学の学生たちとの交流だった。私たちは訪日前、日本語ができず、日本人学生たちとどのように会話を交わしてよいのか不安でいっぱいだったが、実際歓迎会では、片言の韓国語を使って先に声をかけてくれた。このような心遣いは、私たちにとって本当にありがたかった。また、この時、日本人のある学生は流暢な韓国語を使って話しかけてくれた。一方、私は日本語が一つも分からず、恥ずかしい思いをした。



2010年2月下旬、本学の提携校の一つである韓国江原大学校より学生5名、教員1名、大学関係者2名の計8名が来学し、一週間の短期研修を実施した。滞在中、日本語の授業をはじめ、日本文化の体験や日本人学生との交流など、活発な交流が行われた。

当日、大学では様々な授業が行われたが、一つ一つ全てが役に立った。特に専攻に係わる授業では新しい知識を得ることができ、非常に有意義であった。北見工業大学は我校（江原大学校）と同様に国立大学という点では同じだが、工業大学という点では異なる。そのため、実験装置などの研究環境は、我校とは雲梯の差があることを直接認識することができた。我校は実験室が少しずつ離れているが、北見工業大学では一つの建物の内に実験室が全てあり、利便性に富んでいると思った。また、冬の校舎が雪と調和して和やかな印象を与えてくれ、私たちも一度ここで勉強してみたいと思うようになった。

国際交流に関しても我校以上に活発で、多くの留学生たちを見ることができた。そのような光景を目にし、我校も交流をもう少し活性化できたら良いと思った。また、留学生への奨学金制度も良さそうであり、他にもCアワーなど多くの行事を通じて留学生が大学生活を楽しめる機会を提供していた。このことは、留学生たちにとって日本人学生や市民の人等との親睦を図れる画期的な取り組みであり、国際交流センターの思いやりと努力を感じた。

今回、私たちは客の立場で大学を訪問したが、北見工業大学の全ての方々の親切さに強い感動を受けた。一番忙しかった時期にも関わらず、とても親切にしてくれた先生方や学生の皆さんに感謝の気持ちでいっぱい。短い時間だったが、多くのことを見て学ぶことができた北見工業大学での一週間は、私たちの心に今後また留学にきたいという気持ちを芽生えさせてくれた。今回は、日本のすべてのものを見られなかったが、北海道を通じて日本の一面を見られたことは非常に良かったし、私たちの頭の中には「日本=きれいで親切」という印象が鮮明に焼付いた。そして、北海道の美しい風景も・・・。



最後に、各国ごとに文化が異なり、市民意識や生き方も若干違うものの、今回の交流を通じて日本の長所を学ぶことができたし、今後も韓国と日本が多くの交流を通じて未来に向けて互いに発展できたら良いと思った。また、交換留学生の両国間の往来も今後さらに活発になり、両国間において長所と短所を補いあえる国家を超越した真の友達になることを期待する。初日から最終日まで一緒に同行してくださった皆さん、快く迎え入れてくれた日本人学生の皆さんには感謝の念でいっぱい。一週間という短い期間ではあったが、日本を体験できたことは私たちにとって忘れることができない思い出になった。

翻訳＝李慶武（LEE KYOUNG MOO/本学機能材料工学専攻 M2）

